君津平川線湯ノ口向台古墳群第9号墳調査概要

小高春雄

I はじめに

周知の如く、木更津市周辺は東京湾横断道路の
建設に伴い、その受け皿となるべき道路網の整備
が行なわれている。袖ケ浦町〜木更津、君津両市の
山間部を抜ける県道君津平川線の道路改良事業
もその一環であり、昭和63年8月より開発事業に
先行して埋蔵文化財の調査を行なっている。事業
の性格により、調査対象地は広大な遺跡の一角を
占めるにすぎないが、縄文時代・弥生時代の集落,
古墳時代初頭の古墳群を始めとして、多くの遺構
が検出されている。とりわけ、古墳群は本県にお
ける出現期古墳（註1）の様相を考えるうえで,
貴重な資料を提供したといえよう。平成元年3月
をもって、古墳群およびその周辺の調査が終了し
たのでここにその概要を紹介したい。

II 遺跡の位置

遺跡は君津郡袖ケ浦町吉野田字寺原に所在する。
袖ケ浦町の南部は一部小倉川のなす河谷平野を
こえてその南側を含み、木更津市と境界をなして
いる。吉野田地区はその北西部に位置し、小倉川
の支流である鷲川の下流域を含め、細長い丘
陵状台地と深い谷が適度に混在する。本古墳群は
その中でも比較的広い台地と尾根によって結ば
れた略円形の台地上である。北側半分は既に土取
りによって削り取られ、残存部の更に東側半分が
今回の調査区である。

III 立地と環境

本遺跡はその立地という点でいくつかの特徴を
挙げることができる。

まず、小倉川に近接した高台（標高約50m）に位
置し、広い河谷平野はもちろんのこと、対岸の台
地群も広く視界の内におさまることが可能である
こと、加えて、遺跡周囲は鷲水川のなす谷沿いに
比較的まとまった平地（谷水田として利用）が形
成されており、その入口部に突出した場所に立地
することである。

第一の点は、小倉川流域に限らず古墳立地上の
一大共通項ともいえ、事実本地域でも前方後円墳
を含む大きな古墳群のほとんどがそうである。こ
れに対して、第二の点は小倉川の河谷平野の開発
時期とも深く関連する。弥生時代の後期には未だ台
地周囲のいわゆる谷田経営が主流であったのに対
し、古墳時代になると広く開発の先鞭がつけられ,
同後期には面的な広がりを形成するに至ったよう
である。初期の古墳立地を考える場合、むしろ前
代の遺跡分布やそのあり方（遺構の粗密、出土遺

1 湯ノ口向台遺跡
2 山王辻田遺跡（1号墳）
3 坂戸神社古墳
4 手取塚古墳
5 鳥越古墳

第1図 遺跡の位置と古墳分布（国土地理院 1：50,000 木更津・師崎編少）

（502）
物等）が問われているといえよう。その意味で、本遺跡（弥生時代中期～後期終末）を含めた倉水川下流域の弥生時代の遺跡の詳細さを示唆するところが多い。

小倉川流域における出現期古墳は本例が始めており、直接の比較例がないが、その後に位置する方形周溝墓、古墳の伝見例は構造の多い。これはその概要を紹介することはさせざるをえず、木更津市田川遺跡群第1号、第2号方形周溝墓、袖浦町山辺田遺跡（II号墳他古墳・方形周溝墓群）が時期的、地理的に近接する例として挙げよう（註2）。小倉川下流域では、近年開発が進み、諸西遺跡群、大竹遺跡群のように広域にわたる調査が目立っている。本古墳群の出現を理解するにはさらにその成果に注目してゆく必要がある。

IV 9号墳の概要
まず最初に9号墳を含めた古墳群の概要について述べておきたい。
本古墳群は調査区域で方墳4（内2基は盛土が遺存せず方形周溝墓とも受けとれるがここでは方墳として扱う）、円墳1が検出されているが、周辺する西側山林中に前方後円方（円）墳1、円方（方）墳1が確認されており、この両者の合計が現時点で内古墳群の数である。しかし、図をみてわかり通り、遺跡の北側半分は既に消滅しており、その実態はいずれにしても未知数である。但し、地元住民の話によると、消滅した範囲はかつて畑として利用されており、古墳のような高まりはみられなかったとのことであり、大型の古墳は少なくとも存在しなかったのではないかと考えられる。
時期的には、9号墳、10号墳、005がいずれも調査の結果、古墳時代初頭に属することが明らかとなったが、004、029については、いずれも遺物が少なく（土器の細片）、時期決定の決定を欠いている。しかし、種々の状況から、004は周辺の古墳群と同じ時期に（註3）、また、029はそれより新しい古墳時代の中・後期に属するか予想される（註4）。また、発掘調査の手を経たわけではないが、8号墳、7号墳も古墳時代初頭、遠方の方墳群とほぼ同時期かと推測される。つまり、本古墳群は一部時期的に下る古墳も見られるものの、そのほとんどは古墳時代の初頭に属し、しかも、8号墳を中心に、大小の方墳群がその周囲をとりまく群構成をなしていたと思われる。

9号墳はこの8号墳の東側にあり、それより陸橋部、前方部が向き合って周辺する。以下、9号墳の具体的な報告に移る。
9号墳は長軸を東北に向け、墳丘は平面は長方形周溝部を含めた周溝は概円形である。規模は、墳丘部で16×18.5m、周溝部分を含めると、(25.5)×(36.5)mとなるが、断面や周溝部分が低き弧形に近い。この高さを見上げると約50cmを計るが、現状では最も遺存のよい場所で30cmに満たず、その大部分が既に失われたものと思われる。周溝の断面形状は逆台形であるが、各辺中央部には多角なカマボコ型を呈する。
盛土はロームブロックに多少の腐植を交えたもので、旧表土の黑色土とは厳縄出る。古墳そのもののが多少の傾斜面上に作られたためか、低い傾斜部分を埋め戻してあり、築造時、不整の溝と半ば埋没過程にあった住居跡も同様である。セクションを見ても予想できると思うが、その後の畑地化・耕作によって、墳丘をかなり削って斜面を埋め立てている。この時期はおそらく2番目の崩壊中には似た規模を含むことから、当然それ以降に求められよう。墳丘中の埋葬施設もその時点で破壊された可能性が高い。
周溝の覆土は最下層がロームブロックを含み、明るい色調をなす他は、いずれも黄色の腐植土である。炭化する遺物の多くは自らが各土層の積層時期を追うことが可能であり、その結果から、(1) 築造後期ないしは中央部で10～20cmの腐植の堆積をみたが、その後は傾斜に堆積を伴う、(2) 平安時代頃には漸くわずかに Aynı層を残す様になったことが明らかになっている。周溝は平時の利用に僅かずけられながら調査を進めていったがその過程で周溝内に埋葬施設と思われるものは検出していない。一方、刀子、土器を出土した溝内土壌は周溝を掘りこんでおり明瞭に識別できた。
10号墳との関係であるが、両者は見かけ上周溝を共有した形となっている。セクションを検討した限りでも、両者を切り離す関係は認められなかった。しかし、種々の状況からみて、後接する9号墳より若干遅れた段階で10号墳が築かたとみるのが妥当であろう。
陸橋の一部入口部については、その約半分が調
第2図 津ノ口台古墳群地形図（1：600）
査範囲を外れるために、その形状、規模等を知るうえで制約されたものとなった。しかし、この部分は出現期古墳をみるうえで極めて重要な意味を有している。それゆえ、関係者の了解を得たうえで最低限必要と思われる周溝確認調査を行うことにした。現地は絵の密植地であり、限られた調査方法を採る他はなく、その成果も当然限られたものではあったが、その形状はほぼ推測可能である。結論からいうと第3図のようなになるであろう。ここでわかった重要な点は、周溝が入口部を画さず、周溝幅も広がらない、つまり、前方後方形にならないということである。

埋葬施設については、当初、主軸に直交してその中央部に二所の落ち込みを認めたが、調査の進捗に伴い、共に前後（弥生時代後期）の遺構であることが明らかとなった。崩され、消滅したと考えるべきであろう。ただひとつ、明瞭な溝内土壌が墳丘底に隣接して検出されており、これは土壌基が考えられる。

次に出土遺物について述べたい。遺物は周溝内、及び、墳丘中より多量に出土しているが、そのほとんどは土器片である。しかし、土器片の大半は弥生土器であった。これについては、9号墳と重複する弥生時代の稠密な遺構から混入した結果であろう。

古墳時代の遺物はその出土位置から大きく4ヶ所に、また、その出土層位から周溝内内は2グループに、墳丘部では1つと2グループに分かれられる。まず出土位置であるが、(1) 周溝内に単独あるいは数点、(2) 周溝内に複数、(3) 溝内土壌、(4) 墳丘部、に分けられ、第3図で示した遺物でみると、その内訳は、(1) が絕対的4、(2) が「未定」、(3) が「13、14、4」、(4) が「15」である。次に、出土層位では、まず周溝内に、(1) 周溝底、(2) 周溝覆土内に分けられ、同様その内訳は、(1) が「未定」、(2) が「4〜12」である。一方、墳丘部では旧上士に限定されるが、これは、墳丘が大部分失われた結果と思われる。溝内土壌の2点は共に壊底である。即ち、これらを総合すると、1〜4、13〜15については築造時、あるいは、築造後程ない時期に、その他については時間的に下る（ってもそれほど大きな差は考慮しなくてよい）遺物とみるべきであろう。

以上は現状（比較的大破片を復元・接合した結果）をそのまま述べたにすぎず、遺物の相対的な出土状況についてはなお若干の異同のあることを了承願いたい。

次に、個々の遺物について簡単な説明を行ないたい。第4図1〜6は高級であるが、この内、1、2、4、6は大型、3、5は小型の高級になる。前者は個体間にその全体性を打つが、共に口縁部と脚部器が小柄する点に特徴がある。透孔は共に3ヶ所である。後者は内外面丁寧なナデ整形で、紅色でまろっている。また、破壊は内側し、脚部は溝広がりを呈する。透孔は2つ対3ヶ所である。7は台数の小さな腕である。緑色でまろっており、ベテナ、ナデ整形である。8は小型の壺であり、烧成、形状は7と同様。9はいわゆるパレススタイル壺である。外部からみた場合、幅広の複合口縁を呈するが、断面図ではするか通り下端を貼り付けによったもので、器形は下腹形である。底部は薄く底部は小さく上げ底で、安定形に欠ける。口縁部は平衡線（内面は斜方向の列点文によって区画する）を施し、体部はベテナ及びへバ目形状である。10は広口壺である。頸部は結節文で歯切斜繊文を施す。11はいわゆる特殊器皿である。上下に縁部が壊れ、胎土、形状等全体に粗雑な作りといえる。12は小型の壺である。底径は小さく、上げ底であり、いわゆる「受口状口縁」を呈する。口縁部以外に斜縁状の列点文、胸部外側にはヘバ目形状の後、上位に横走羽状文（ワジ状工芸ではない）を施す。胎土に石英を含み、器壁薄く、焼き締まっている（図5）。

13〜15は金属製品である。13は先端及び茎の末を欠く銅鉄である。軟質で歪みや断面の不整が認められる。14は小型の板状鉄斧である。15は先端を欠く刀子である。

16は土玉である。縄に割られている。

V まとめ

以上、9号墳の概要について述べた。ここでは9号墳を含めた本古墳群の年代観、及び、その有する意義について言及し、今後の研究の礎とした。

9号墳の年代観については未だ問題のあるところと思われるが、その相対的な位置付けについては可能である。即ち、出土土器を概観した場合、
第3図 9号墳地の遺物出土状況
第4図 9号墳出土遺物（Ⅱ，Ⅲ）
その多くは非在地系、より限定すると、東海西部の土器に近似しており、元晩期古段階に位置付けられると思われる。本県でいえば、土器編年に混乱がみられる現在、実例で比較すると、市原市神門4号墳～3号墳までの範囲内にほぼ収まるものとしてよいだろう。在地系の土器（第4図No10の広口壷他、他に図示していないが、伝統的な複合口縁装飾壷もみられる）をみてみても、県内の各病例からして妥当なところではなくなろう。それは、本県北部において未だ北関東系弥生土器の残存する時期である。

次に、その遺構からみた場合、本古墳が中央に入口部を有する形態に属しており（田中新史氏の分類ではBI型）、このような形態がいわゆる出現期にみられる遺構の特徴を示すものであることのaddressからも近年の調査結果から明らかである。本県では市原市国分寺台遺跡群、同大覧遺跡、袖ヶ浦町山王辺田遺跡等で類例が報告されているが、いずれも本例と前後する時期とみとめよう。

さて、既に9号墳及びその周拠に展開する方墳群が一連のもので、8号墳をとりまきように存在する可能性を指摘した。9号墳の年代からすれば、8号墳も同じかあるいは遅れ年代さえあたえられよう。実際、9号墳の周辺確認調査－それは9号墳の前方部前面に一部及んだが－においても周辺は確認されなかった。前方部前面に周辺が及ばないことはほぼ確実であり、また、低く狭い前方部があり方からしても蓋然性が高いといえよう。8号墳を前方後方方とみるか前方後方方とみるかはなお微妙であるが、墳丘長約50mを計り、同じく出現期古墳である神門古墳群中の変遺跡よりも大きく、また、遺存も良い。そして、重要な点は、飯田作や山王辺田遺跡にみられるような群構成をとることである。神門古墳群の場合、周囲の状況が必ずしもはっきりしないが（頭6）、その後成立した古墳群では飯田作や山王辺田遺跡に代表されるような群構成がしばしば認められる。それら前者もいえる本古墳群はその意味で貴重な例といえよう。

このように、9号墳は単にその年代が出現期ということのみならず、その形態や周辺の古墳群との関係という点でも、本県における該期のあり方を知るうえで特筆してよいだろう。但し、隣接する8号墳、7号墳の内容如何でその資料的価値は更に高くなるはずである。今回の報告はその意味で本古墳群研究の一つのステップにすぎない。

**注**

1）「出現期」という名称については、田中新史氏の提案にしたがった（田中1984年）。
2）報告書末末年であり、その詳細は知りえないが、袖ヶ浦町教育委員会の御好意により、遺構実測図及び出土遺物を見せていただいた。
3）西側約半分が調査区域外にあるが、重複する弥生時代の住居跡を切っていることや、その形態（中央に入口部を有する）から当該期とみられる。
4）重複する遺構（004、及び、弥生時代の住居跡）を絞って切っており、また、彌生時代の弥生時代（前半）の調査区域（南側斜面）において古墳時代中期の遺物若千と後期に属する塚基墓数基出土・検出している。
5）非常に特徴的な土器であり、いわゆる近江系の遺に近似する。
6）神門古墳群の周囲は部分的な調査が行なわれており、その限りでは周囲に方墳群が巡る可能性は少ないようである。

**引用文献**

愛知考古学講話会編『欠山式土器とその前後研究・報告編』 東海埋蔵文化財研究会 1987
三森俊彦・飯田正一『市原市大覧遺跡』（財）千葉県都市公社 1974
白井久美子『研究ノート』 市原市草刈遺跡の方墳群』 『研究連絡誌』第22号 1988
袖ヶ浦町史編纂委員会編『袖ヶ浦町史 通史編上巻』 袖ヶ浦町 1985
田中新史『出現期古墳の理解と展望－東国神門五号墳の調査と関連して－』『古代』第77号 1984
千田利明他『田川遺跡群』 田川遺跡群発掘調査会 1980
沼沢豊・森尚登『佐倉市飯作合作遺跡』（財）千葉県文化財センター 1978